

Hamlet に見られる “nature” という 語についての試論 (1)

友 清 蓉 子

どの作品もそうであるように、*Hamlet* にも、これはと思う言葉、作品の内容と深く関わっている言葉、がある。“nature” もそういう類の言葉の一つであると言えよう。

Hamlet に nature は、natural, unnatural という形容詞を含めて、40箇所が使われており、それらの言葉の表わすそれぞれの意味内容は、大ざっぱに言って11種類に及んでいる。ただ1種類の意味内容しか持たないものから、おそらくは nature という言葉が持つと、作者が考えている意味内容のすべてを含むものまで、様々な幅広い使い方がなされている。戯曲に於るある言葉の持つ意味は、その言葉を含む台詞を与えられている登場人物の性格、台詞の置かれた状況、そういう言葉を使った作者の個人的趣味や物の考え方、それに作品が書かれた時代の思潮等、様々なレベルでの力が影響し合ってそこに焦点を結んでいることを考慮に入れておかねばならない。

本論では、*Hamlet* に於る nature という言葉を通して、悲劇の時代に入った Shakespeare の最も根本にあったと思われる思考を探り、作品の色合いを決定して、作品を「哲学的」と評されるようになさしめた所以のものを考察してみたい。

作品中、意味内容が最も広く、おそらくは nature という言葉の持つあらゆる意味を含んでいると思われる例は次の台詞の中にあらわれている。

Queen.....all that lives must die,
 Passing through nature to eternity. (I. ii. 72-73)
 (以降下線筆者)

これは、先王 Hamlet の死後、いつまでも喪服を脱がず暗い顔をして
 いる王子 Hamlet に語りかける王妃 Gertrude の言葉であるが、O. E. D.
 は eternity の項でこの部分を挙げて次のように説明している。

In expressed or implied contrast with time. Opposed to
 'time' in its restricted sense of duration measured by the suc-
 cession of physical phenomena. Hence, the condition into which
 the soul enters at death, the future life. Also, eternal welfare.

eternity の定義から、はからずもこの部分の nature の意味が明らか
 になっているが、nature は、物質的現象の継起する限定された持続時間、
 現世であって、永遠の安寧を得る来世に対比されている。eternity が、永
 遠という時間の観念と切り離せない言葉であるから、ここで使われている
 nature には、限定された生の「時間」という意味が強調されることにな
 っている。

Gertrude の台詞の全体の意味については、全くその通りである。しか
 し、「生の時間」の持つ具体的内容は、ここにはまだ無い。換言すれば、
 この nature には nature のあらゆる意味が含まれている、が、この引用
 部の直前に、'Thou know'st 'tis common' とあるように、一種格言め
 いており、あまり複雑とも言えない Gertrude の、しかも公の場での発言
 であることを考えあわせると、ここには nature という誰れをも納得させ
 る「言葉」だけがあって、Hamlet がこの語りかけに 'Ay, madam, it is
 common.' と答えて慚然とするのももつともだ、と思わせるところがある。
 しかし、Shakespeare は、この nature を nature という言葉の持つ意
 味のすべてを注ぎ込むような思いで使ったであろう、と私には思われる。

それは、これから一つ一つ検討してゆく nature の意味が、最終的には、この Gertrude の台詞の中の nature に吸収されていくように思われるからである。

一幕五場。亡霊に手招きされて、一人その後を追った Hamlet に、亡霊は自分の身を明かして次のように告げる。

Ghost. I am thy father's spirit,
 Doom'd for a certain term to walk the night,
 And for the day confined to fast in fires,
 Till the foul crimes done in my days of nature
 Are burnt and purged away. (I. v. 9-13)

下線部 nature は、先の Gertrude が使ったのとほとんど同じ現世、という意味で使われている。しかし、ここで新たに、nature という生の状態、生の時間から eternity に入ってそこで永遠の安寧を得るには、それなりの準備が必要ながことが解ってくる。先王 Hamlet はそうする暇も無く、眠っている間に殺されたために、今恐しい地獄の責苦を味わっているのである。逆に言うと、nature にあっては、人間は悪人らしくもみえない Hamlet 王でさえ、死に際しては浄められなければならないほど汚れた罪深い存在である、という認識がある。先の eternity に、そこでは永遠の安寧を得ることができる、という意味から逆に、nature の welfare でない、あるいは限られた意味での welfare しかないという認識が含まれているのが窺えるのと、nature がどちらかといえばマイナスの意味を含んでいるという点で同一である。

‘eternity’に入ることができるのは、肉体を失った‘soul’である。nature に、soul を閉じ込めておく制約的な「肉体」という意味が出てくるのは当然であろう。

Ham.....What may this mean,
 That thou, dead corse, again in complete steel

Revisit'st thus the glimpses of the moon,
 Making night hideous; and we fools of nature
 So horridly to shake our disposition
 With thoughts beyond the reaches of our souls?

(I. iv. 51-56)

厳寒の真夜中、眼前に現われた 'spirit' (I. iv. 40) と 'goblin' (I. iv. 40) とつかぬ亡霊に、出現の意図を問いかける Hamlet は、'spirit' でも 'goblin' でもない 'fools of nature' である我が身の不便さを嘆くかのようなのである。勿論、「現世、この世の物質的現象」(に玩ばれる fools である人間) という意味で nature は使われているが、'our souls' に限界を与え、亡霊の世界と人間界との境を隔てているのは、他ならぬ「肉体」であって、nature はそういう肉体という意味も含んでいる。

更らに進んで、nature が肉体 (body) と全く同義に使われている箇所がある。

亡霊の語る Hamlet 王殺害の場面。眠っている王の耳に注がれた毒液は、あたかも水銀のような速さで 'natural gates and alleys of the body' (I. v. 67) を流れて体中の血液を凝まらせてしまった、というのであるが、これらの体の部分は医学的に言うと、veins (静脈) と、arteries (動脈) であって、形容詞ではあるが、nature は body と同じ意味で使われている。

これとほとんど同じ意味であるが、次の台詞では、'heart' と対比されていることから、精神的なものに対する肉体的な、という意味が加わっている。

Ham.....To die: to sleep;
 No more; and by a sleep to say we end
 The heart-ache and the thousand natural shocks
 That flesh is heir to, 'tis a consummation
 Devoutly to be wish'd. (III. i. 60-64)

悩みの深い Hamlet だから、彼は死を、肉体に休息を与えるばかりでなく、それ以上に心に安らぎを与えるものとして考えている。心と体は、はっきり区別されており、‘heart’ に対比された natural の意味は、‘That flesh is heir to’ という形容詞節によって、更らに明確になっている。

それでは nature が、‘heart’ のような精神的な部分と、全く関係が無いかというと、そうではない。例えば次の例は、肉体的な意味より精神的な意味が強いように思われる。

Pol......

This is the very ecstasy of love,
Whose violent property fordoes itself
And leads the will to desperate undertakings
As oft as any passion under heaven
That does afflict our natures. (II. i. 102-106)

Ophelia の部屋を訪れた Hamlet の尋常でない振舞いの原因を、Polonius は Hamlet の Ophelia に対する恋心の故であると考えた。この natures に肉体的意味が全く無いとは言いきれないが、恋が Hamlet の精神を狂わせた、というのだから、natures の精神的な意味が比重を増す。

この時、Polonius は Hamlet に関して全く見当はずれの思い込みをした訳であるが、後にはこの台詞が思いがけない形で実現することになる。自分自身の死（と、Hamlet に対する失恋(?)）によって、自分の娘が、本当に気が狂ってしまうのである。

四幕五場、Laertes が哀れな Ophelia の狂乱の姿を目のあたりに、次のように語る場面がある。この Laertes の台詞の nature は、人間の精神的な部分だけを意味しているように思われる。

Laer......

Nature is fine in love, and where 'tis fine,

It sends some precious instance of itself
After the thing it loves. (IV. v. 158-160)

Ophelia は、愛する者 (Polonius) を失ったために、自分の nature の大事な部分 ('some precious instance of itself') を捧げてしまった。捧げられた物は、彼女の「正常な精神」である。nature は、この「正常な精神」を含む「人の心」と解せよう。

これより少し意味をせばめて、「人が肉親に対して当然持つはずの情愛」といった意味の nature は、繰り返し使われている。

Ghost.....

If thou hast nature in thee, bear it not ;

.....

(I. v. 81)

実の弟 Claudius によって、生命も王位も王妃も一度に奪われた Hamlet 王が、王子 Hamlet に事の次第を語り復讐を誓わせる件であるが、nature は、「子として父親を思う気持」である。この nature は、極悪非道の叔父の不正を憎み、これを正したいと願う気持と無関係ではない。父親の無念を晴らすことを願い、不正を許しておかないと決意する正常で健康な感情である。王子 Hamlet は、父親に対して敬愛の念を抱いており、この nature に欠けたところは無い。

世の母親の子供に対する情愛は、他の肉親間の情愛にもまして強いことが広く認められてきたが、二人の男性の登場人物の目に映る Gertrude のそれも例外ではない。

Pol.....as you said, and wisely was it said,

'Tis meet that some more audience than a mother,

Since nature makes them partial, should o'erhear

The speech, of vantage.

(III. iii. 31-33)

Gertrude は、本来ならば Claudius の側につくべき人物である。が、

Claudius にとって具合の悪いことには、彼女は母親として息子の Hamlet を大そう愛している。この母親の子供に対する情愛は、Claudius と雖もどうすることも出来ない。悪事の伴侶として最も頼りにならないのが、Gertrude のこの nature であり、悪くするとこれが命取りになるかもしれない。Gertrude と Hamlet と二人だけの会見の場には、何としてもスパイをおくり込んで監視させておかねばならない。Polonius の、「母親は子供に甘くなる」(‘nature makes them partial’) という一般論は、元々 Claudius の口から出たものであるか、あるいは Polonius の勝手な注釈なのか判然としないが、スパイ行為を提案した Claudius の計算を隠して、そういう行為を正当化し、Polonius をしきりに感心させてさえている。nature は、Claudius にとっては邪魔な手強い相手であるが、Polonius には当然の動かし難い心情として理解されている。Hamlet に対する Gertrude の nature は、「早すぎた再婚」(‘our o’erhasty marriage’ (II. ii. 57) に関しての多少の後めたさがあるだけで、ほとんど無傷である。

一方、Hamlet の Gertrude に対するそれは、幻滅と不信に満たされ、ひどく傷ついている。

Ham.....

O heart, lose not thy nature; let ever

The soul of Nero enter this firm bosom:

Let me be cruel, not unnatural: (III. ii. 383-385)

Hamlet の nature は、やせ細り摩り切れていて、母親を ‘Nero’ のように自分の手で殺すことを辛うじて思い止まらせるというだけのものになっている。母親を殺さないためには、nature を改めて呼び起こしそれと言いきかせねばならない。母親に対して ‘cruel’ であることは、Hamlet にとってもはや ‘unnatural’ ではない。‘unnatural’ であるのは、子供

である自分が母親を自らの手で殺すことだけであって、nature がそうであったように、unnatural であることの意味は極度に狭められている。

傷ついて瀕死の状態にある Hamlet の nature に比べて、Laertes の、妹 Ophelia に対する nature は、健全で美しい。狂乱の Ophelia は、小川で溺れ死ぬ。訃報を受けて涙をみせる Laertes は、涙を女々しい心のせいであるとして一旦は退けるが、禁ずることができない。‘nature her custom holds’ (IV. vii 188) と、涙にくれる Laertes の nature は、Ophelia のあまりにも哀れな死に際して兄の心を満たした、妹に対する情愛の念である。汚れを知らぬ Ophelia だから、彼女に向けられた Laertes の nature は、Ophelia 同様少しのゆがみもなく美しい。

Gertrude の中にある母親として子 Hamlet を思う気持 (nature) に手を焼いた Claudius であったが、元々 Claudius という人物は、nature や, natural といったものに反するところに身を置いている。

Ghost. Revenge his foul and most unnatural murder.

.....

Murder most foul, as in the best it is;
But this most foul, strange and unnatural.

(I. v. 25, 27-28)

Hamlet という芝居の始まる前に、すでに Claudius は unnatural な罪を犯している。弟として兄に対して当然持つはずの情愛 (nature) に逆って、実の兄を殺害するという罪である。事は秘かに行なわれたために、Hamlet 王の死因を知る者は無く、王位を継いだ Claudius はこの後、死後天の裁きを受ける時に明らかにされるであろう「事の真相」(‘his true nature’ (III. iii. 62)) を隠して生き続ける。

Claudius が最初に犯した罪については、もう一度、別の人物 Horatio によって、‘carnal, bloody, and unnatural acts’ (V. ii. 373) と、事情

を知らない Fortinbras 等に説明されるが、同一の罪に関して異った二人の人物が、同じ unnatural という言葉を使っているのは、他の殺人とは違う兄弟殺しという罪の異常さを認めているためであろう。

Hamlet は、母親との会見に臨んで、たとえ ‘cruel’ であっても ‘unnatural’ であってはならない、と自らを戒めたが、この時の unnatural も、子が親を殺すという行為に対する言葉であった。弟が兄に、子供が母親に当然持つはずの情愛 (nature) を、Claudius は退け破壊し、Hamlet はやっとの思いではあったが子供としての立場を守り、それを保つことができた。unnatural の側に身を置く Claudius と、nature の側に踏み止まった Hamlet と、好対照をなしている。

実際、unnatural という言葉は、作品中四度しか使われていなくて、そのうちの三度は Claudius の Hamlet 王殺害に言及し、あとの一度は Hamlet が思い止まった母親殺しに関して使われている。どちらも血を分けた肉親を殺す場合であって、肉親でない者を殺す場合には、少なくともこの作品の中では、unnatural という言葉は使われていない。

肉体と精神を兼ね備えた nature は、人間そのものである。

Laer.....

A violet in the youth of primy nature,
Forward, not permanent, sweet, not lasting,
The perfume and suppliance of a minute ;
No more.

(I. ii. 7-9)

肉体、精神共に成長著しい青春時代に片時生まれたほのかな恋心、だから、恐らく永つづきはすまい、Hamlet の Ophelia に対する気持を計って得た Laertes の結論である。nature は、このあとすぐ次の台詞で Laertes によって説明が加えられる。

Laer.....

For nature, crescent, does not grow alone

In thews and bulk, but, as this temple waxes,
 The inward service of the mind and soul
 Grows wide withal. (I. iii. 11-14)

肉体（‘*thews and bulk*’）と、精神（‘*mind and soul*’）は、nature の相伴って成長する二つの要素として同等に考えられている。O. E. D. の *nature* の項では、この部分の引用の扱いは次のようである。

The inherent power or force by which the physical and mental activities of man are sustained. (Sometimes personified.)

Laertes の台詞の中の nature は、‘*power*’ や ‘*force*’ といった意味に比べると、より具体性を持っているように思われる。Ophelia に、Hamlet との交際には注意をするように諭している Laertes だから、彼の念頭にあるのは Hamlet であって、nature は、Hamlet を含む「人間」である。そして、この「人間」は、成長する肉体と精神を支える ‘*power*’ や ‘*force*’ を持つ、どちらかといえば生物学的な意味での「人間」である。

同じ「人間」という意味での *nature* も、これとは異った捉え方をした例がある。

「父王を殺し、母親を穢し、王位と自分 (Hamlet) の間に割り込み、(Hamlet の) 命さえ奪おうとした」(I. ii. 64-66) Claudius を、Hamlet は ‘*this canker of our nature*’ (V. ii. 69) と呼んでいる。(我々の) 肉体を滅ぼし、魂を脅し、清浄な倫理を犯し、国の秩序を乱す Claudius は、‘*our nature*’ を蝕む害虫である。nature は、肉体と精神（魂を持ち、倫理や秩序を尊ぶ）を持つ「人間」であって、先に挙げた例に比べると、社会的な広がりを持つ存在として考えられている。

nature に修飾語がついて、「人間」という意味の他に、人間に備わっている何か、を示唆している場合もあって、例としては次の部分が挙げられ

る。

Ham.....

'Tis dangerous when the baser nature comes
Between the pass and fell incensed points
Of mighty opposites. (V. ii. 60-62)

‘the baser nature’ は、即ち Rosencrantz と Guildenstern であり、
‘mighty opposites’ は、Hamlet と Claudius である。nature は、「人
間」であるが、‘baser’ で修飾され、又、‘mighty opposites’ と対比さ
れて、「氏素姓」や、「身分」をも暗示している。その上、Rosencrantz と
Guildenstern は、同じ友人でありながら Horatio と異り、Hamlet の心
の秘密を探ろうとしたり、Claudius の手先として使われる卑しい
（‘baser’）「性格」（‘nature’）を持った者達でもある。

「氏素姓」という意味での nature は、‘fortune’s star’ と並べて、
‘nature’s livery’ と使われると (I. iv. 30)、後天的な偶然の、という前
者に対して、「先天的な」という意味が強くなる。先王 Hamlet と、Clau-
dius は、兄弟でありながら（氏素姓は同一）、Hamlet によれば、一方
はギリシャの神々に喩えられ (III. iii. 55-63)、もう一方は ‘paddock’,
‘bat’, ‘gib’ (III, iii. 190) と醜悪な動物に喩えられるほどに異っている
が、同じ事実を亡霊は次のように語っている。

Ghost.....a wretch whose natural gifts were poor

To those of mine! (I. v. 51-52)

たとえ氏素姓は同一でも、Hamlet 王と Claudius は、「先天的」能力
に大きな違いがあった、ということである。

Hamlet 王亡き後、Claudius の治める王国の状態は、Hamlet にとっ
て耐え難く思われ、最初の独白でその心象風景が次のように述べられてい
る。

Ham.....'tis an unweeded garden,
 That grows to seed; things rank and gross in nature
 Possess it merely. (I. ii. 135-137)

王国を占領している下等な輩（‘things rank and gross in nature’）の最たるものは、Claudius である。恐らくは、見事な庭園であった王国を荒れ果てさせた Claudius が、nature（「生得的素質」‘natural gifts’）に於て、先王に劣っているばかりか、‘unnatural murder’を犯して王位についたがために、ここに chaos がもたらされている事を、この時の Hamlet は予感こそすれ、まだ知らない。Claudius の治める王国が、一見華やかに、政務は滞りなく進められているようであり、その実、正に Hamlet の心に映し出されたように、‘an unweeded garden’ というのがその本当の姿であったのは、Hamlet の物事の本質を見透す力の並々ならぬことを印象づけている。

先天的、生得的な nature は、Gertrude を母に持った Hamlet の苦々しい思いの込められた次の台詞に、受け入れる他ないものとして述べられている。

Ham.....for some vicious mole of nature in them,
 As, in their birth—wherein they are not guilty,
 Since nature cannot choose his origin—
 By the o’ergrowth of some complexion,
 Oft breaking down the pales and forts of reason,
 (I. iv. 24-28)

自分では選択することのできない生まれ、それによって生得的に与えられてしまう nature, それを決定する大きな要因の一つ ‘complexion’。Hamlet は、Horatio に比べて ‘passion’s slave’ (III. ii. 77) に傾く自分の性格を自覚しており、ともすれば理性の垣根（‘the pales and forts of reason’）を破ろうとする激しい抑え難いものを内に感じている。

nature は、先天的、生得的なものであって、当人に罪は無い（‘wherein they are not guilty’）し、そうならうと思っただけでなれる類いのものでもない。与えられた ‘complexion’ を勝手に変えることも不可能なようである。

ところで、この先天的、生得的 nature を、変化させることが問題になっている部分がある。

Gertrude に身を慎しむように忠告する Hamlet の台詞がそれである。

Ham.....

For use almost can change the stamp of nature,
And either master the devil, or throw him out
With wondrous potency. (III. iv. 168–170)

ここに、‘almost’ という語が使われているのを見逃すことはできない。確かに習慣（‘use’）は威力を発揮する。しかし、生まれながらの天性（‘the stamp of nature’）を、完全には変化させ得ないという含みがこの語の裏にはある、ということである。

もって生まれたもの（nature）が、習慣という大きな力を以ってしても完全には変化させられないように、後天的に外から付け加えられたもので、たとえ nature のように身に付いていても、それは本当の nature とは言えない、という考えの表われている台詞がある。

King.....this gallant

Had witchcraft in’t; he grew unto his seat;
And to such wondrous doing brought his horse,
As had he been incorpsed and demi-natured
With the brave beast: (IV. vii. 84–88)

人馬一体となって、肉体的にも人と馬とを分け難く（‘incorpsed’）、意思の疎通の見事さは、人と馬とが互いに相手の nature を持っている（‘demi-

natured’) かのようであるという。ところが、ここにも ‘As had he been...’ という言葉がある。人と馬とがそれぞれに自分に備った nature を持っていて、その上、お互いの nature を、あたかも自分の nature のように身につけている。しかし、本来の nature とは、飽く迄もそのものに特有な本質的なものであって、この後天的に外から付け加えられたものとは別物である、という認識がここにはある。

誕生と同時に身に備った、生得の、という意味の薄れた、そのものが持っている「本質」という意味での nature は、当然の事ながら、生命あるものに限らず、物や事柄等にも使われる。

King.....But’tis not so above,

There is no shuffling, there the action lies

In his true nature; (III. iii. 60-62)

地上にあっては、権力や財力で、犯した罪をごまかす事も出来る、が、天上にあっては、人間の行為はその「本当の姿」(‘his true nature’)を隠すことは出来ない。今は王位にあって、王冠と王妃を実の兄の手から奪った罪を誰れにも気付かれることなく隠しおおせている Claudius にとって、天上で明らかにされるのは他ならぬ自分の nature でもある。どんなに巧みに隠し、人の目を欺いても、物事の本当の姿 (nature) は如何ともし難い。

Claudius は、王冠と王妃を狙って計画的に事を為し、事件の真相はこれを意図して隠し、何くわぬ顔をして王位についているのだから、天上で明らかにされるはずの nature には、彼としては全く弁明の余地がない。

一方、Hamlet が惹き起した、Polonius を殺し Ophelia の精神を狂わせるという ‘feats’ (IV. vii 6) には、被害者である Laertes の言葉にさえ Hamlet を糾弾するに怯むところがあると解するのを全く否定し去ることが出来ないような微妙なところがある。

Laer.....tell me

Why you proceeded not against these feats,
So crimeful and so capital in nature

.....

(IV. vii. 5-8)

Polonius の死は、半分は自ら招いたものであるし、Hamlet の側からいえば、はずみであった。Hamlet が意図して真実を隠そうとした事実は無い。Ophelia の狂気も、遠因は Hamlet にあるものの、もう一つ Hamlet の直接的責任を問うところまではいかない。少くとも事情を知る者にとっては、Hamlet を責めるには躊躇するものがあるはずである。‘these feats’ について、舞台の外で (off-stage) Claudius が Laertes にどう説明したか推測するしかないし、又、Laertes が Hamlet の ‘these feats’ についてどこまで考えをめぐらしたかも解らない。‘in nature’ を、「とても」、「この上なく」という強めの意味にとって、この台詞は単純に Laertes の怒りを表わしている、と言って間違いないと思うが、‘in nature’ には、Hamlet の行為にも一理ある、とか、殺された方も悪い、とか、これは仕方がなかった、とかいう爽雜物的思考を全部取り去って、それでもやっぱり本質的に (‘in nature’) ‘crimeful’ で ‘capital’ である、という Laertes の思いがある、と解するのを全く退けてしまうことも出来ない。更らに、Laertes の性格描写が ‘in nature’ にも託されているのは当然であって、nature の「本質 (的なもの)」という意味は、Laertes の論理でいけば、事の成りゆき、過程はどうであれ、親父は死んでしまった、妹は気が狂った、だから Hamlet を憎むのだ、ということになる。此処に Laertes の躊躇を読み取るのは事情を知る者の犯す誤ちかもしれない、Shakespeare は過程を無視して結果だけにとびつく性急な Laertes の性格を描いているのかもしれない。Hamlet が犯したとされる罪の持つ曖昧さが、Laertes の台詞にこういう形で表現されている、と考える事が出来るように思われる。

nature が、あるものの「本質」とか、「ありのままの姿」とかいう意味で使われていて、台詞そのものも有名であるのは次の例である。

Ham.....the purpose of playing, whose end, both at the first and now, was and is, to hold, as 'twere, the mirror up to nature; to show virtue her own feature, scorn her own image, and the very age and body of the time his form and pressure. (III. ii. 23-27)

nature は、'virtue' の 'feature', 'scorn' の 'image', 'time' の 'form' と 'pressure' といった具合に、それぞれのものの持つ「本質的なもの」を指すと同時に、そういうものを所有している 'virtue' や 'scorn' や 'time' も又、指している。鏡が映し出す時、役者が演じる時、映し出され、演じられた対象、('virtue', 'scorn', 'time') と、その nature ('feature', 'image', 'form', 'pressure') とを、どこでどう区別できるだろうか。nature は、Hamlet が俳優達に、過不足なく演ずる事を教えるための言葉であると同時に、演劇 (Shakespeare 自身の作品を含めて) が目指そうとしている目標を語る言葉でもある。芝居という「鏡」に映し出される nature は、人間と、人の世の様々な出来事、そのありのままの姿であって、Hamlet の台詞を通して、Shakespeare の肉声が聞こえて来るようである。

「そのものの持つ本来の性質」という意味の nature が、中世の段階での「自然科学」に当たる熟語を作り、劇中劇という、Hamlet の住む世界とは異った世界でのその使われ方をしていると思われる場合がある。

Luc.....

Thou mixture rank, of midnight weeds collected,
With Hecate's ban thrice blasted, thrice infected,
Thy natural magic and dire property,
On wholesome life usurps immediately.

(III. ii. 251-254)

真夜中に集められた草に三度 Hecate の呪いと毒気をかけて生み出された ‘natural magic’ は、草の持つ本来の効力を引き出すべく処理されて得られた力である。Hamlet 王を殺した毒薬が、‘juice of cursed hebenon’ (I. v. 62) と、あっさり言われているのに対して、中世に於ては ‘a legitimate department of study and practice’ (O. E. D. magicの項) とされていた natural magic の方法らしい作り方を語って、劇中劇の雰囲気をつくる一助をなしている。

罪 ‘sin’ の存在 (の自覚) に「必然的に伴うもの」という意味での nature は、‘sin’ 「そのもの」という意味での nature とは区別した方がいいかもしれない。

Queen.....

To my sick soul, as sin’s true nature is,

Each toy seems prologue to some great amiss ;

.....

(IV. v. 17-18)

Gertrude は、夫を殺した義理の弟と再婚した。Ghost によれば、それは彼女の ‘lust’ (I. v. 55) の故であったが、会見の場で Hamlet は、Gertrude に向って、それが彼女の nature の故であることを指摘する (III. iv. 168)。そこで初めて、Gertrude は自分の nature を直視し、自分の中の ‘sin’ の存在に気付いたのである。必然的に彼女は ‘sick soul’ を抱くようになった。‘true’ という語は、それまで ‘sin’ を犯していながらその事に気付かず、従って何の心の痛みも感じていなかった Gertrude が、今 ‘sick soul’ を抱きながら、‘sin’ の存在を自覚する前とそれ以後の自己の在り方を正確に把握していることを示めしている。

nature が裸のまま使われた場合、そのものに特有の「本質(的なもの)」という意味であっても、それはそのものという種に於ては普遍性を持つが、所有格がついた場合、非常に限定された、特殊な、個人的なもの、を表わ

すようになる。

King. 'Tis sweet and commendable in your nature, Hamlet,
To give these mourning duties to your father :
..... (I. ii. 87-88)

先王 Hamlet の死に続く、Gertrude との結婚、即位、と滞りなく事は運んでいる、と思いたい Claudius だが、ただ一つ Hamlet の様子が気に入らない。父親の死後頑なに喪服を脱ごうとせず、物想いにふける Hamlet の様子は、脛に傷持つ Claudius にとっては、自分に対する非難とも、挑戦とも受けとれる。Claudius としては、公の場を利用して Hamlet に注意を促し、せめて目障りな喪服だけでも脱がせたい。Hamlet の父親の死を、特別な事件ではなく、人間なら誰れしも出遇うありふれた出来事として風化させてしまいたい。そうすれば、彼が父親の死因に疑惑を抱くなどという事もおこらずに済ませるかもしれない。

Claudius は、Hamlet の嘆きの異常さを次のように言ってきかせる。

King.....'tis a fault to heaven,
A fault against the dead, a fault to nature,
To reason most absurd ; (I. ii. 101-103)

nature は、Claudius にとって尋常であると思われる「子の父親に対する情愛」である。一方、先の 'your nature' は、Hamlet だけが持っているもの、彼の感情とか、性格とか、父親に対する特別の愛情とか、を表わしている。改めて言うまでもなく、所有格があれば、特定の人物に限られた心情、無ければ、一般的、大多数の人々に共通の、共有の心情ということである。何が普通で、何が特殊か、ということになると主観の問題で、ここでは Claudius がそう考えているというにすぎないが、同じ「子が父親を思う気持」という nature の意味でも、所有格の有る無しで、微妙な

使い分けがされている。

Hamlet が剣の試合を前にして Laertes に対して和解を乞う台詞にも、所有格のついた nature が使われている。

Ham.....What I have done,
That might your nature, honour and exception
Roughly awake, I here proclaim was madness.

(V. ii. 222-224)

Laertesの、「父親と妹に対する情愛」をこのnatureは含むが、Laertes個人の性格、といった意味も強い。性急な Laertes であればこそ、Poloniusの死は本人にも非があると認めているようには思われず、Opheliaの死も又、そのすべての責任を Hamlet に負わせて、一途に彼を憎む。所有格のついたこの nature は、こういう性格を持つ Laertes という人物でなかったら、Hamlet の行為に異った反応を示めしたかもしれないことを、暗にほのめかしている。

又、所有格のある nature で、特殊な、変わった人物であることを確認させるような使い方をしている例がある。Hamlet の Osric に対する言葉である。

Ham. To this effect, sir; after what flourish your nature will.

(V. ii. 176)

Hamlet と Laertes との剣の試合を計画した Claudius の使者として現われた Osric は、土地持ちの成り上がりの、軽薄さを絵に描いたような人物であるが、Hamlet は一頻り彼をからかった後、こう言って帰す。Osric が Claudius のもとに帰って Hamlet の返事をどのように報告したか、Hamlet が言った通り、いかにも Osric らしく、彼の nature にそって仕事を終えたであろうことは予想に難くない。彼の nature は、五

幕二場で110行にわたって遺憾なく描かれているので、報告の場面は眼に見えるようでさえある。

本論の冒頭で、nature のもつマイナスの意味についてふれたが、逆に、unnatural で chaotic な王国の中にあつて、natural であることの良さは、そうでない状態をかこつ事で、憧れのように語られている部分がある。台詞は、言う迄もなく Hamlet のものである。

Ham.....there is something in this more than natural, if philosophy could find it out. (II. ii. 363-364)

叔父が王位についた途端、それまで叔父をばかにしきっていた連中までが、彼の肖像画を奪いあうように大金を払って求める異常さを、Hamlet は‘more than natural’であると感じている。権力をものにした人間に対して、その人間の本質はそれによって少しも変化した訳ではないのに、欲にかられてへつらう風潮を、Hamlet は苦々しい思いで眺めている。Hamlet には、父 Hamlet と、叔父 Claudius の違いが、‘Hyperion’ と ‘satyr’ (I. ii. 140) との違いほどに明瞭であり、今では叔父に追随している者も以前はそのことを知っていたはずである。unnatural な側に身を置く Claudius の治める ‘unweeded garden’ では、‘things rank and gross in nature’ がはびこり、‘more than natural’ な行為が蔓延しているのだと、Hamlet には思えてならない。natural は、本質的であればおのずと生ずる「正常な」(状態)である。

nature の持つ良さが、積極的に語られている場面もある。役者達を前に演技の指導をする Hamlet の台詞がそうある。

Ham.....Suit the action to the word, the word to the action; with this special observance, that you o'erstep not the modesty of nature: (III. ii. 17-20)

unnaturalな雰囲気の中であって、何もかもが信じられなくなっているHamletが、仕草と台詞の一致を求め、大げさにもならず大人しすぎもしない演技をしてくれるように頼む時、その基準になっているのが nature である。偽りのないこと、本質的であること、だからこそそこから生まれる‘modesty’を、Hamletは渴きが水を求めるように欲している。自分の思いのままに振舞える数少ない行為の一つに、この演技指導があつて、芝居という、現実とは異った世界の中で、日頃の願望を実現させたいと思っているかのようである。

人間のような被造物ばかりでなく、造化の神も、natureと表わされる。

Ham.....I have thought some of Nature's journeymen had made men and not made them well, they imitated humanity so abominably. (III. ii. 31-34)

‘the modesty of nature’ (III. ii. 21-22) を踏みはずして、‘nature’ (III. ii. 25) を映すどころか、自分自身が‘men’ (nature) であることさえ否定してしまったような役者達を、Hamletは‘Nature’が自分の手で造ったものならばあれほどひどい代物になるはずがない、と間接的に造化の神を賛えている。Hamletにとって造化の神 Nature は、疑いもなく彼の味方であるように思われている。

Hamletに於る、nature, natural, unnaturalという語の総数は40、その内訳は、これらを使った登場人物とその回数を多い順に並べると、Hamlet 17, Ghost 6, Claudius 5, Laertes 5, Polonius 3, Gertrude 2, Horatio 1, Lucianus 1, である。minor characterになると、その数が減少するのも、これらの語が内容と深い関係にあることの証しと言えるかもしれない。それにしてもHamletの17という数は、他を断然引き離している。

‘unnatural murder’を犯したClaudiusによって、Hamletはそれ

までの世界観を完全にひっくり返されてしまった。見事な地球は荒涼とした岬に、黄金の光をちりばめた天空は毒気のたちこめる穢い場所に、天使や神にさえ似た素晴らしい傑作であった人間は塵の塊にしか思えなくなってしまった (II. ii. 295-308) Hamlet にとって、最後の拠となったのが nature であったのではなかろうか。

nature とは、もって生まれて受け入れるより他仕方のないもの、人間の肉体であり、その精神であり、人間そのものでさえあるもの、物事の本質、物事の本当の姿、人間が手を加える事のできないもの、人間の生そのもの、生の時間、現世、である。Hamlet は、幸福な世界観を失うことによって、nature という、時には嫌悪すべき、又時には愛すべき動かし難い実体を見据えるようになったように思われる。

Hamlet と、Shakespeare とをどこまで重ね合わせることが出来るか、いつものことながら、作者 Shakespeare と、登場人物との関係は一筋縄にはゆかないが、今回ただ一つ言えることは、nature という言葉と、その実体について、Shakespeare は、Hamlet の中のどの登場人物よりもよく知っていたということである。そして、Shakespeare の、nature に関する様々な思いがすべて込められているのが、最初に引用した Gertrude の台詞、'all that lives must die, Passing through nature to eternity' であるように思われてならない。